次期工事を期して

—東京女子医科大学図書館—

特集：図書館建築

大井 晴*

抄 録

当図書館は早晚着工されるであろう次期工事において、完成された機能を持つべく計画中である。1966年に竣工した現在の図書館はその意味では貴重なテストケースというべきである。施設は独立家屋ではなく、基礎教室の二階三階を占めているが、併設であるということは各階共通の施設がレイアウトの中に既成条件をもちこむことでもあった。またキャンパス内における図書館の位置の選択も許されない。機能的に反省すべき点は、総体的にいて書庫面積の狭いことがあげられる。現在の書庫は次期工事が1968年末に完成されるのを予定して作られた面積しかない。しかし最終における蔵書の許容量の決定は時代の変化の激しさの前に最も苦慮するところである。カウンターと事務室との接近、個室の是非、学生、研究者のための閲覧施設の機構が次期プランの重要な課題でもある。ともかく近年は図書館の新築が各地で行なわれている状況でもあるが、新機能を十分に発揮し得るの要は館員の資質の問題であることを銘記したい。

1966年11月に竣工した現在の図書館はまだ完成された図書館とはいえない。それは第二期工事をまわって完成されるのである。新図書館は独立家屋ではなく基礎校舎の2階3階を占めている併設建築である。この基礎教室校舎は近い将来現在と同面積（1フロア600m²）相当のものが現在の建物に続いて東側に増築される予定であるが、建築基準法の解釈に誤りがあったりなどして、最初計画した形態は多少変更される模様である。着工の時期も未定である。

当図書館の必要とする面積のうち主なものをあげると蔵書収容能力6万冊～10万冊の書庫面積と閲覧者124席（研究者、学生数の10%と看護婦事務系職員数の1%）を収容する閲覧面積、職員数15名を収容し得る事務室とである。

しかし図書館施設が他の施設に合併されるということは機構上相当の制約をうけなければ

ならない。

1. 位置の選択を許さない。

もっともこれは、もともとキャンパスが狭いので選択の自由はなかったことかもしれない。同じ建物内にいることではあり、専門課程5年生までの学生と基礎教室の研究者には恵まれた場所ではあるが、時間的制約の多い臨床教室からは遠くなってしまったということは、これがむしろ逆ならば案外公平な位置ではなかったろうかという感がないでもない。

2. 将来のスペース拡張の計画がたたない。

人口の都市集中化による地価の暴騰と第二次大戦以後の資料の増大ぶり、また科学技術の発達には将来の蔵書計画はたて難いといった情勢でもあるかもしれないが、図書館施設が2階3階に位置づけられているということは面積の拡張を簡単に約束はしてくれない。

3. レイアウトの自在性が狭められてい

* Sei Oi 東京女子医大図書館

る。

5 m のスパン、中央は廊下といった全階層の構造なので廊下幅 3 m の両側に 5 m 間隔に柱が建つ。階段、エレベーター、トイレ、ダクトスペースも各階共通して固定されている。

以上のような既存条件をもって設計を進めたのであるが、そこには当然次期工事の設計も予測してのことでなければならない。だが未完成ということは次期工事において若干修正が許されるということでもあり、その意味ではこんどの一期工事完成後の使用は、理想的機能を探るためのまことに貴重なテストケースというべきであろう。

以下機能的な面から現在の図書館を検討してみるが、まず第一に新図書館を通常の図書館の概念としてみるならば誰でも書庫スペースが少ないとみるだろうと思う。

2 階 3 階の床の厚さは約 10 cm、梁を南北に多く渡しこの階層は全てが書架の重量に耐えられるように造られていて、この面積内の設計の変更は差し支えないということになっているが、一期工事における書庫スペースは 327 m²、館内備付図書の約 3 年間の増冊を許す程度にしか面積をとっていない。しかもこの増冊算定も多少見込み違いであったかもしれないのだ。理由は

a. 蔵書統計に確実さがなかったということ。

図書館事務としても重要なものの一つである統計のうち過去の廃棄、増加冊数の記録が不完全であったということは事務処理の不行届きのそりを免れない。それに加えて仮設図書施設に満 3 年を過したときの蔵書の多くは自家製の書架に収められていたため、書架寸法は規格外のものであり、書架数をもって蔵書冊数を計算するのは不正確な感があった。蔵書の量を寸法で測る方法もある。これも考えないではなかったが、相当根気を要することなので実行せずにしまった。

b. 移転後の資料の増冊推定に誤算があっ

たこと。

旧独立図書館、それに続く仮設図書館時代は書庫が閲覧席とは隔てられていたり、または倉庫同然の館内事情で閉架式に等しかったので閲覧者が実際に書架に接し蔵書状態を眺めるという機会は少なかったが、新築図書館において閲覧者の収書に対する批判は堰を切ったように高まった。図書館側ではその要望に応えるための予算の増額、収書方針の修正などで館内備付図書の増冊を考慮せざるを得なくなっている。なかでも一般教養に関する図書の増加がもっとも多い。

c. 設計図の読みに誤算があったこと。

東西中央の、廊下として設計されている部分に配管設備のある 6 m 70 cm 幅の天井が、他の天井に比べて 50 cm も低いということは書架が一段少ないということであり、それを指摘されたのは書架の配置がきまってからであった。いま一つ東西両側のダクトスペースの出入口に当る部分にも計画通りの書架をとりつけることができずにしまった。しかし 3 階書庫内に設けた予約キャレル 8 席はそのままだに残した。次期工事までに書架が不足するとすればまずこの予約キャレルを除いてしまわなければならない。そして次期工事においてスペース要求に最も優先するのはこの書庫スペースである。そして現段階においてそれと対照的に広いのは事務室であろう。

1 人使用面積 6.6 m² とすれば現在 9 人に対し作業場を含む 115 m² の事務室は広い。だがこれまで狭い面積で仕事をせざるを得なかった重圧感から解放されて今後の事務量の増加を測ってみたい気持もあって十分な面積を主張した。それに加えて次のような条件も考慮した。

a. 隣席の者に邪魔をされないだけの孤立感のある机の配置にしたい。

b. テレックスが近い将来購入されるとしてそのスペースを確保したい。

c. 館長室、作業場への通路としてのゆとりを加えたい。

まずゆとりのある施設としては閲覧室もあげられる。306 m²の面積に現在 63 席、一人当たり 3.3 m²を割りあてるとしても席はもっと増設し得る。

図書館はその機能上空調設備を持っています、それは図書館独立の設備として許可された。閲覧者は暖冷房設備のある広い部屋というだけでも来館が楽しいらしい。それでも椅子の全部が占められるということがまず殆んどない。女子の読書欲が男性に比べて旺盛ではないということも一つの原因かもしれないが、図書館として反省しなければならないのは

a. 単行本の収書方針が図書館集中方式でないということと、専門の外国雑誌が教室閲覧制度になっているということ。

単行本の点については前にも触れたが、当大学では教室図書を購入は殆んど図書館の費用で行なわれていてそれがすべて教室に吸収されてしまう。これまでの大学予算の関係上やむを得ない措置であったかもしれないが、学生のための教授推薦図書の他に、館内に殆んどみるべきものがないということは大学の中央図書館としての在り方に一大転換を要する時期にきていることを示しているようである。

b. 参考業務の不活潑

これは館員の資質にもよることには違いないが、積極的に乗り出してからまだ日が浅いので技術的訓練の習得がなされてもいないし、宣伝もゆき届いていない。現在備えている二次資料だけでも十分に館員がこなし得るようになったら文献探索の面からも図書館は積極的な呼びかけができるようになると思うのである。

以下閲覧施設に関して多少述べる。

閲覧機の利用はキャレルの使用が間違いくらいよい。閲覧者はキャレルの増設を希望している。そして四人掛け机を占めるグループは大方は学生であり、このグループはいつも何かを囁きたがる。このことは共同学習のため

の隔離された部屋を必要としていることを示しているのであろう。教養課程も含まれている当図書館ではそれ等の学生、また専門課程の学生研究者の閲覧がお互いに妨げられないためのレイアウトにすることは次期工事の重要な課題でもある。

閲覧機を既成より 2 cm 低くしたのは読書のための眼からの適当な距離を考えたからであったが、現在の机は決して閲覧者に適正とはいえないかもしれない。それは椅子が低いからではなく机がまだ高いせいではないかと思う。個人差もあることだが、2 cm 低くしたのはせめてもの気安めというべきかもしれない。床が柔いビニール製の敷物であるため体を動かすとき、プラスチックのはめこみのある脚の椅子は摩擦が多すぎて重い。

閲覧室内で批判的になるのはカウンターのごわめきと電話、複写機（エレファックス 1000）の音である。だがこれも図書館の規模で問題の処理の仕方も違ってくることで、このような不平も理想論であろうが、次期工事のレイアウトの参考になる。

カウンターと関連して考えなければならない施設として事務室との距離があげられる。現在施設が二階三階と距てられているが、同じフロアにあるということは館員の活動、また経費の節約の面でも利点が多い。これも二期工事に期待するところである。

照明は覆いなしの NEC の白色蛍光灯である。現在最も問題になっているのは書庫室の照明であろう。あるべき個所が直角に渡した梁に邪魔されて絶えてしまったりするのでこれも建築上のミスとして修正されるべきである。

閲覧室はそれとは対照的に明るい。それが床の白さと対応するためか、なにか落ち着きのない雰囲気と考えさせられたが、閲覧者には別に批判の声もない。ただ床に長尺物のタイルを使ったということは材質の選択に相当制限をうけることでもあったし、部分的な修理は傷物になるということでもある。変質し

易い材質なのか、茶色に変色した箇所が数カ所にできてしまったのは、それを貼る時のミスなのか掃除の時のミスなのか現在判断がつかない。些かのでき事であるがご参考のために書いておく。

次期工事の課題としてあげられるものに個室設備の是非がある。現在予約のキャレルは使用期間を二週間として衝立て片側を仕切った個人机であり、忘れものと混同されないために携帯品も退館時にはいつも近くの場所に備えつけられたロッカーに入れて帰らなければならないという不自由なものである。資料の不備のためもあるだろうが、研究者が多く資料を持ちこんで長期に利用しているといったことが少いのは、この中途半端な設備のためもあるだろう。閉ざされた部屋の管理のわずらわしさもあり、これも学生のためのスタディールームの是非と合せて検討しなければならない。

その他幾つかとり上げたい問題をのべておく。

防火設備といえば書庫の火事の発生率はオープン方式の現在、閲覧室のそれとはさして変らないと思う。二階閲覧室のシャッター設備の如きは書庫内の資料に延焼するのを防ぐという役目は失われてきていて、館内の防火には消火法の研究や館内管理などがより重大なのではないだろうか。現在シャッターを閉館時にいつも降して帰るという注意はしていない。

リフト：現在全階を通じて上下するエレベーターが頻繁に使われている状態でないにも拘らず、館内専用のリフトを使用した方が資料を運ぶには手取り早くて便利である。移動のきかない固定された設備であるだけに、二期工事のレイアウトに基だしい変化がなければ手軽に利用することが出来たのはよかったと思っている。

ルーバー：一階を除き、南側全階を通して取り付けられたものである。科学実験室、資料保管所の直射日光を避けるためには当を得

た設備であろうが、ルーバーの幅か傾斜に誤算があり、直射日光は殆んど四季を通じて入ってくる。閲覧者が冬日光を喜ぶのは暖房設備の調節がまだうまく行っていないせいかもしれないが、資料の配架がこのような条件に左右されるのは決して好ましいこととはいえない。結局カーテンまたはブラインドをとりつけることになるだろう。

会議室兼資料展示室：展示するだけの資料も少ない現在、またルーバーを通して陽の射す南側のこの部屋は10名位の学会雑誌編集員の会合の場所として使われているにすぎないが、他に場所を占めるところのない館外の施設がこのスペースを要求してくる。55m²の面積が、5m スパンの窓を持っているだけで一室構成の単位として計画されるレイアウトのとり方はもっと研究されていいものであろう。一階にも会議室があるので55m²もの面積を使用する会合は稀にしかない。現在このスペースは三分されている。

2次資料配架に関する反省もあるが、これは簡単な配置転換の問題にすぎないので省略した。

以上新築機構に関する反省はほぼ述べた。総じていえることは、この一期工事に当たってわれわれ館員が希望したプランは殆んど通して貰ったということである。私は前佐藤図書館長と同伴で幾度か慶応の津田良成氏のもとを訪れ、長時間教えを乞うてレイアウトを作成した。プラン作成者としての自信は全く津田良成氏その他の諸氏の後楯以外の何ものでもない。だがプラン作成には館員の建築に対する関心とチームワークが必要である。女性の建築に対する知識の乏しさと関心の薄さは、当館員の場合こんどの第一期工事の経験によって大分矯正された筈である。次期工事に関しては十分な態度をもって臨みたい。

最後に第二期工事における建築委員会の構成について説明したい。メンバーは、基礎教室側からの代表として学長から任命されているのは教授5名で、そのうちの1名は衛生学

教授である石井館長であるが、これは基礎教室側の代表者というよりも図書館側の任務を負うて出席されるのである。それに加えて病院長、副院長、事務長、財務理事、教授課長、営繕課長が出席し、学長のもとに建築業者（鹿島建設）側とプランを練る。そこで協議された事項が青写真や文書となって新建築の居住者であるべき各施設に配布される。その資料に基づいて各自レイアウトの作成にとりかかるといった具合になるのだが、実務者でない館長の委員会出席は館員側からみれば代行者のもどかしさがなくてもない。ただ時に応じて館員であるわれわれが出席を命じられて意見を求められるが一般に建築に関する常識をもって図面を読みとる能力がいかほど大切であるかを痛感させられる。われわれは建築の専門家ではないが、己れを納得させ得るだけの関心をもってこの委員会の動向を見守ってゆかなければならない。この稿を草するころは必要面積を委員会に提出したのみでそ

の後の結果は得ていないがこのめまぐるしい社会状況の変化に当ってやはり不安に思うのは蔵書量をどれだけ確保し得る図書館を作ったら先の後悔の種にならないで済むだろうかということである。今後の図書館業務の機械化の問題、図書館相互の協力の様相などのすべてが関連してこの問題をむずかしく考えさせてくるのである。

近年は昨今の社会情勢の変化のめまぐるしさに追いつてられるように、もう図書館としての機能を果さなくなった旧来の建物を取り壊して新時代に添おうとする機運が日本の大学にも各所に起っている現状である。私たちはここでその大学の図書館の豪華さと競うつもりはない。要は新時代の図書館機能を果し得る一定の場が与えられたら、それをフルに活用することである。そのための館員の資質の向上もまた図書館建築の活潑化と同様に新時代の館員としてのわれわれに迫ってくる問題でもある。

2 階

3 階